

## カトリーン・ゴフの小農と帝国主義

内山田 康

### はじめに

1992年2月から4月にかけて、私はケララの州都トリバンドラムに住み、時々小旅行に出て調査地を探しながら、マラヤラム語の勉強をしたり、ケララ大学の図書館やブリティッシュライブラリーに通って文献資料を読んだ。カトリーン・ゴフの *Rural Change in Southeast India, 1950s to 1980s* (Gough 1989) をブリティッシュライブラリーで見つけたのはこの頃だ。ケララの隣のタミルナードゥ州タンジャヴールで行った再訪調査に基づく村落の社会変革について書かれたこの著作は、この作品の前作にあたる *Rural Society in Southeast India* (Gough 1981) と同様に、南インドの村落社会の社会構造とその変容をテーマにした詳細な民族誌の記述にポリティカルエコノミーの分析を加えたものだ。

この二部作の背景について簡単に補足しておこう。ゴフはケンブリッジ大学にナーヤルの親族関係をテーマにした博士論文を提出した後、1951年から1953年にかけてタンジャヴールでフィールドワークを行い、1976年に再訪調査を行っている。この二つの調査に基づいて書かれた第一作と第二作は、共にベトナム戦争後に出版されている。このタイミングをゴフの個人史と彼女が人類学を実践した学問の政治のフィールドに位置づけると、収集されたデータと参照枠の関係に関わるいくつか重要な問題が見えてくるだろう。以下で詳しく述べるように、ゴフは二度目のフィールドワーク（1951-53年）から戻ると、アメリカで一度目のフィールドワーク（1947-49年）で収集したデータに基づく著作の出版準備をした。その後イギリスで1年間人類学を教える間に再婚してアメリカに渡った。マッカーシズムとして知られる国家主導の思想弾圧によって多くの研究者が職場から追放された冷戦時代のアメリカ合衆国で、ゴフは1960代始めに大学を追われ、ベトナム戦争に協力させられる日常から逃れて移住したカナダでも1960年代の終わりに大学から追放されている。このような経験を経て、ゴフはベトナム戦争が終わった翌年の1976年、タンジャヴールの再訪調査からカナダに戻る足でベトナムを10日間訪問した。ゴフはこの時、アジアの小農たちによる革命の可能性を強く信じていた。ゴフは帰国後、ベトナムに好意的な *Ten Times More Beautiful: Rebuilding of Vietnam* を出版した (Gough 1978)。

この本を出版したマンスリー・レビュー社は、1960年代から1970年代にかけてゴフの戦闘的な論文を掲載し続けた社会主義・反帝国主義を掲げる *Monthly Review* の出版元でもある。このような長い回り道の後で、タンジャヴールの村落社会をテーマにした二部作は書かれていた。

少なくともタンジャヴール村落研究の第一作目について言えることは、1951年から1953年にかけてゴフがフィールドで集めたブラーマンと不可触民についての詳細な民族誌的データと、小農の反乱を革命の萌芽と見るゴフの反帝国主義的な社会変動理解の分析枠との間に、超えようのない乖離が存在することだ。フィールドワークの後で、フィールドワークの最中には明確な形では持っていなかった参照枠を事後的に当てはめている。南インド農村の貧しい人びとを革命の担い手となる階級として見るという思想的な選択を、反戦運動と思想弾圧を経験した上で、事後的に行っている。クリス・フラーが指摘しているように、豊かな民族誌的記述の内容とは矛盾する没歴史的な分析の枠組みがデータに押し付けられている (Fuller 1983)。

ゴフは1950年代から1960年代にかけて優れた民族誌を数多く発表した社会人類学者だった。彼女は社会的な弱者に対して暖かい態度で接することで知られる一方、自らの暴力の影響力について無自覚な権力者に対しては、多くの大学の人類学者たちがそうであったような、自己保身的で曖昧な態度は取らなかった。ベトナム戦争について沈黙していたアメリカ人類学協会に、ベトナム戦争に反対するように働きかけた態度に現れていたように、ゴフは国家による暴力に対して明確で率直な異議申し立てを表明した。この一人の良心的な人類学者が、ある時期を境に優美な人類学的思考をやめてしまった。ゴフはその分岐点が1957年だったと書いている (Gough 1982: xiii)。この年ケララでは共産党が総選挙で勝利して政権を握り、農地改革に着手した。フランケンバーグは *Anthropology Today* のために書いたゴフの死亡記事の冒頭で、ゴフは他者のために行動する煽動家だったと書いている (Frankenberg 1990: 23)。ゴフは他者、すなわち彼女が所属した国家の暴力によって日々の生活を脅かされた弱者の側に立って前衛として行動することを選んだ。ゴフの著作は1960年代に入るとこのような政治的選択の影響をはっきりと刻印しているが、彼女が南インドの村落社会を描いた民族誌は1980年代に入っても分厚いままだ。ゴフは1953年4月、タンジャヴールで共産党の活動を目の当たりにした時、貧しい不可触民が自由になる可能性に期待を抱いた。しかし、ゴフは *Rural Society in Southeast India* の

結論部分で、資本主義システムの周縁にある立憲政治の枠組の中では、機能しているように見える貧困救済の政策も農業労働者のための組合も、不可触民をさらに貧しているだけだ、革命が必要だという (Gough 1981)。ゴフはキューバとベトナムを念頭に置いてこれを書いていた。

*Rural Change in Southeast India, 1950s to 1980s* を手にした私は、ポリティカルエコノミーで博士論文を書くことを止めて大学院を変えた後、二度目の M.Phil を急いで終えて、新たに人類学の博士論文を書くためにフィールドワークを始めたばかりだった。私は前作と同じように民族誌をポリティカルエコノミーの言葉で議論するスタイルが古くさいと思い、この本をすぐに返却してしまった。この本は、人類学の主要なジャーナルで書評されることもなかった。今、この二部作を欧米の古本屋で見つけることは難しい。対照的に、民族誌的な内容を持たないベトナムのポリティカルエコノミー的研究である *Ten Times More Beautiful* と *Political Economy in Vietnam* は簡単に手に入れることができる (Gough 1978, 1990)。私は手に入りにくいポリティカルエコノミーの言葉で議論された南インドの民族誌の方が、よりゴフらしい作品だと思う。その詳細な民族誌と、そのような記述と矛盾した分析の組み合わせには、冷戦時代の良心的な人類学者の学問的ジレンマと、政治的選択が直面した矛盾が現れている。

私は本稿において、ゴフの二重の学問的変節、すなわち第一に南インド社会を対象とした正統的な人類学的研究から反帝国主義に立脚したアジア小農のポリティカルエコノミーへと変化した学問の対象と参照枠の転換、第二に没政治的に生きることが可能だった (しかしブルデューが議論したように国家への依存と引き換えにこの疑似的自律を獲得している) 大学の学者という生き方から闘う研究者・煽動家への転向について、彼女の著作、手書きのノート、その生涯と研究について書かれた論文や記事などを参照しながら、研究対象、研究者が埋め込まれていた政治のフィールド、研究者が迫られたイデオロギー的な選択の間の相互的な関係と、歴史の中の個人史に現れたメタ物語の輪郭を大雑把に素描することを試みた。この作業を行うにあたって、私はゴフの 1960 年代の政治への関わりと研究の関係に焦点を合わせつつ、その前後についても必要最小限と思われる部分を記述した。

## 人類学者としての出発

ゴフは 1947 年から 1949 年にかけてケララでフィールドワークを行い、1950 年に博士論文 *Changes in Matrilineal Kinship on the Malabar Coast* をケンブリッジ大学に提出した。この学位論文の章の多くは、ナーヤルの親族関係、婚姻、女性のイニシエーションを扱った独立の論文として王立人類学協会のジャーナル、あるいはデヴィッド・シュナイダーとの共著などを通して発表された。しかし、ナーヤルの性について書かれた一つの章だけは発表されることがなかった。1998 年の夏から秋にかけて、研究のためにロンドンに数ヶ月間滞在していた時、私はフラワーからゴフの博士論文の中に未刊行のままだった部分があることを聞いて、ケンブリッジに出かけた。私は書見台の上にゴフの分厚い博士論文を開いて、出版されなかったこの章を読んだ<sup>[1]</sup>。紙と鉛筆でノートを取りながら、私は一体どのようにしたらナーヤルの性生活についてここまで詳細な記録を採ることが出来たのだろうと考えた。この部分に限らず、優れたフィールドワーカーだったゴフは、ケララにおいてもタミルナードゥにおいても細かい部分を丹念に、しかも長期間に渡って調べている。複写を取ることが禁じられているゴフの博士論文を閲覧するためにはサインをしなければならない。閲覧した人たちが名前を書き込んだリストは極めて短く、私が 1995 年に提出した博士論文の指導教授だったフラワーが四半世紀前に閲覧した時のサインが私のサインのすぐ上にあっただことからも、私はこの優れた人類学者の研究が正当に評価されていないという印象を持った。博士論文を基にゴフが 1950 年代に書き改め、1950 年代から 1961 年にかけて発表された論文には、ナーヤルを中心とした親族関係、サンバンダン婚とそれに関わる通過儀礼、祖霊および死霊との関係に関する優れた古典が多い (Gough 1952, 1955a, 1959a, 1959b; Schneider and Gough 1961)。1960 年代以降のゴフの著作に見られる階級、小農の反乱、革命、帝国主義の概念はまだ中心概念になっていない。

2006 年 7 月にバンクーバーのブリティッシュコロンビア大学 (UBC) においてゴフのフィールドノートを読んだ際、私はゴフがケララで行った最初のフィールドワーク (1947-49 年) においてカースト間関係、特にナーヤルと不可触民

---

[1] 近くの席では 80 代半ばのローズマリー・ファースが、震える手でメモを取りながら論文を読んでいた。私は彼女より 10 歳以上も年上の夫レイモンド・ファースが、退職後 30 年経ってもセミナーに出て来てシャープなコメントをする様子を思い出して、何てすごい人たちだろうと思いながらゴフの博士論文を読み始めた。

たちの関係について、少数のナーヤルのインフォーマントたちから聞き取りをしていることを知った。不可触民たちから直接聞いたのではなかったという限界はあるが、その感情を交えない抑制された民族誌的記述の分量の多さから、ゴフが様々な差別を受けていた不可触民たちに関心を持っていたこと、また彼女のホストであった高カーストのナーヤルたちによる差別的な態度に対しても深い関心を寄せていたことが理解できた。例えば「政治構造」(Political Structure)と分類されたボックス1-3の資料中の「カースト間関係」(Intercaste Relations)という表題が書かれたノートの1949年3月7日付けの記録は、繰り返し出てくるあるナーヤルの女性インフォーマントが、新しい習慣よりも古い習慣の方が良いと思っているという記述から始まる。ケララでは不可触民が、公道を歩くこと、支配カーストが管理していた寺院の中に入って神を拝むこと、公共の建物に入ることを禁じていた<sup>[2]</sup>。

ケララ南部のトラヴァンコール藩王国、英領マドラスの一部だった北部のマラバル、中央部のコーチン藩王国において、不可触民が寺院に入ることを可能にした布告(Temple Entry Proclamation)がそれぞれ1936年、1946年、1947年に布告されている。ゴフがコーチンとマラバルでフィールドワークを行った1947年から1949年まで期間は、不可触民が(リニージ所有の寺院を除いて)村の寺院とそれより上位の地域を代表する寺院、あるいは他の主要な寺院に入ることが許されるようになった直後の時期だ。1949年3月にゴフのインフォーマントの女性が、昔の習慣の方が良いと言っているのは、ナーヤルたちにとっては不可触民たちが寺院に入ってこなかった数年前の方が良かったという意味だと考えられる。不可触民が同じ池で沐浴するので、せっかく沐浴したのに穢れてしまうという不満や、不可触民が中に入ってくるので寺院に行くのを止めて家の中で神を拝んだという証言が記録されている。紙面と時間の制約上、詳細については割愛する。

しかし、次のことだけは強調しておこう。カースト間関係の項目の下に、ゴフが親しかつたらしいナーヤルのインフォーマントの位置から経験された低カーストとの関係についての記述を、感情を交えず青インクで幾頁にもわたって丹念に記録している事実から、私はゴフが古典的な意味において優れたフィールドワーカーだったことを知ると同時に、彼女がカースト間の差別および近代

---

<sup>[2]</sup> この空間化したカースト間関係は、ケララ社会の人類学的研究において「距離における穢れ」(distant pollution)として知られている。

がもたらした社会変容と新しい公平の機会に対して大きな関心を抱いて何度も質問をしていたらしいことを推察した。1949年3月、ゴフは明らかに抑圧と差別を伴うカースト間関係に関心を持っていた。しかし、支配的なナーヤルが管理していた寺院に入場を試みた不可触民たちと、それを妨害した有力者たちの衝突をテーマにした論文が書かれまで20年待たねばならない (Gough 1970a)。

滑り出しは順調だった。ゴフがナーヤル女性の通過儀礼について書いた論文は、1953年のカール賞を受賞した (Gough 1955a)。その後、A・R・ラドクリフ＝ブラウンとE・E・エヴァンス＝プリチャードに師事したインドの大物人類学者M・N・スリニヴァスが編集したインド村落研究論集と、ケンブリッジ大学のエドモンド・リーチが編集したカースト論集にオーソドックスな人類学的論考を書いている (Gough 1955b, 1960)。また既に述べたようにハーバード大学のシュナイダーとの共著の主要部分を書いている (Schneider and Gough 1961)。この時期に書かれたものを読む限り、ゴフの人類学者としての未来は可能性に満ちたものだった。弾圧を受ける前のゴフは、自分が所属する国家の暴力 (例えばゴフが後に問題にする大英帝国によるインドの植民地支配、あるいはアメリカが介入して拡大していったベトナム戦争) によって抑圧されていた第三世界の人びとのために政治的に活動するという意識を持っていないように思われる。萌芽的なものがあってもまだそれを表明していない。ゴフは社会変革に早くから関心を抱いていたが、それは革命に対する期待ではなかった (Gough 1952, 1955b)。

## 分岐点

ゴフの人類学は、ゴフの生き方と深く関わっている。彼女の死亡記事 (Frankenberg 1990)、最初の夫エリック・ミラーの死亡記事 (Stein 2002)、再婚相手のデヴィッド・アベリーの死亡記事 (Donald 2006) などを使って少し補っておこう。ケララで共にフィールドワークを行ったゴフとミラーは1947年にケララで結婚して、1950年の博士論文提出と同時に離婚している。フィールドワーク中の困難と就職の難しさが関係していたようだ。ミラーが1950年代に発表した二つの論文を読むと、内容においても、議論の進め方においても、ゴフの同時代の論文と親和性が高い。ゴフはナーヤルの親族関係とその変化を中心に議論した。ミラーはナーヤルの親族集団による土地所有とカースト間関係との相互関係、およびその変化について議論した (Miller 1954, 1955)。私は博士

論文を書くにあたってゴフとミラーの論文を補完的に使う中で、ゴフとミラーの論文の内容が似ているとフラーに話したところ、二人が夫婦だったことを教えられた。ゴフが 1947 年から 1949 年にかけて書いたとされるフィールドノートには異なる二つの筆跡で書かれている部分は何カ所もある。明らかにゴフが一人で書いているノートにも、ミラーの興味と重なるカースト間関係に関するデータが多い。私は二つの筆跡で書かれたノートを読みながら、ゴフとミラーがナーヤルを中心とした親族関係、親族集団、カースト間関係について、データを共有し、フィールドで何度も議論していたと想像した。

1951 年から 1953 年にかけてゴフはタミルナードゥでフィールドワークを行った。この期間に書かれたフィールドノートには一つの筆跡しかない。私は、1947-49 年のノートにだけ現れ、1951-53 年のフィールドノートには現れないもう一つの筆跡をミラーのものだと考えた。離婚する前、ゴフは職を求めて当時オックスフォード大学の人類学の教授だったエヴァンス＝プリチャードに会っている。エヴァンス＝プリチャードは次のように言った。「もしあなたの夫が選ばれたら、あなたを雇うことは出来ない。もしあなたの夫が選ばれなかったら、あなたを雇うことは出来ない。彼に屈辱を与えるからだ」(Frankenberg 1990: 23)。ゴフは親族重用を禁止した雇用規則のために、あるいはそれを理由にゴフに可能性を与えなかったエヴァンス＝プリチャードの族長主義的な性差別のために、夫が応募していたオックスフォード大学で人類学者として雇用される可能性は皆無だった。もしも、ゴフが一人の独立した人類学者として就職の機会を与られていたら、彼女の人類学者としての仕事は全く違ったものになっていただろう。結局ミラーも職を得られなかった。

二人は離婚して、ゴフはタミルナードゥへ、ミラーは東北タイへ向かい、それぞれフィールドワークを行っている。タイから戻ったミラーは、カルカッタでコンサルタントになった。一方、ゴフは 1953 年から 1954 年にかけてハーバード大学で客員として過ごして、当時ハーバードにいたシュナイダーと共に *Matrilineal Kinship* (1961) の出版の準備を行っている。ゴフはこの著作の大半を執筆したが、この本に二つの章を書いたアベリーと出会ったのもこの時期のことだ。1954 年から 1955 年にかけてゴフはマックス・グラックマンが教授をしていたマンチェスター大学で人類学の講師をした。社会人類学の正統的な論文が生まれたのはこのような環境においてである。1955 年にゴフはアベリーとマンチェスターで結婚した後、アメリカに移住した。

ミラーについて付け加えておこう。ケンブリッジ大学でケララのナーヤルとキリスト教徒に関する博士論文を書くために、ゴフの博士論文とミラーの博士論文の両方を読んだフラーによると、ミラーの学位論文は、ゴフのそれに比べると、より短くより理論的に洗練されたものだという。ミラーが人類学のジャーナルに書いた唯一の論文と唯一の書評を読むと、ミラーがゴフに比べて理論的な思考をしたらしい片鱗を伺うことができる (Miller 1954, 1953)。社会科学をマネジメントに応用した実学分野でミラーから博士論文の指導を受けたマーク・スタインは、ミラーのコメントは「カミソリのように鋭い」 (razor sharp) と書いている (Stein 2002)。時期が重なるかどうかは不明だが、ゴフがハーバード大学で正統的な人類学の研究を行っていた頃、ミラーもハーバードに来ていた。この頃ミラーの関心は、人類学や心理学を含めた社会科学による人間関係の理解を、生産管理や組織管理に応用する方向へと転回した。

1955年に出版された *India's Villages* の中に、ミラーの論文とゴフの論文が収められている。二人はそれぞれの論文の中で、昔のパートナーの論文を敬意を込めて参照し合っている。1955年に出版されたこの論文 (初出は1952年) を最後に、ミラーは人類学の世界から姿を消した<sup>[3]</sup>。

### 抑圧された者たちへの共感

1955年に移住したアメリカにおいて、ゴフは大学の教員が政治的に国家と深く関わり合っていることを経験した。1957年にケララで誕生した共産党政権と共産党主導の農地改革政策は、ゴフのフィールドとの関係を変える決定的な出来事だった。共産党の改革政策は地主たちによる激しい反対を受け、1959年にケララは中央政府によって議会は解散され大統領統治に移された。しかし1959年のキューバ革命の成功は、ゴフが抱いていた抑圧的な国家が存在しない新しい

---

<sup>[3]</sup> ミラーは後にロンドンに本社がある Tavistock Institute of Human Relations という人間関係の研究を政府機関及び企業においてマネジメントに利用することを目的とするコンサルタント会社で40年以上働いてマネジメント関連の著作を数多く書いた。一方、ゴフは小農の反乱に社会主義革命の萌芽を見いだして反帝国主義の立場からコミットする人類学者・煽動家になって行った。ゴフの最初の夫ミラーと二番目の夫アベリーには共通の関心事があった。それは精神分析の応用に関するものである。ミラーは精神分析を組織管理の手段として利用しようとした。アベリーは精神分析の方法を人類学に応用して人類学を方法論的により精緻なものにしようとした。



世界の到来への希望に確信を与えただろう。このような希望を綴った政治パンフレット *The Decline of the State and the Coming of World Society* をゴフは黒人マルクス主義理論家 C・L・R・ジェームズが設立した Correspondence 社から出版している (Gough 1962)。ゴフがトリニダード出身のジェームズらトロツキストと接近した 1960 年から FBI はゴフの行動を監視し始めた。

1960 年 7 月 11 日、FBI のインフォーマントは、ゴフが他のトロツキストたちとトリニダードに向かったことを通報している (Price 2004: 308)。ゴフの言動を監視して通報するインフォーマントたちは教室の中にもいた。1960 年、南ベトナム解放戦線が結成され、ベトナム戦争が始まった。アメリカはベトナムに対する軍事介入および、これと対になったベトナム社会に対する政治的、社会的、経済的、そして心理学を応用した介入を深めて行った (Tanham 1966)。ゴフは、第三世界における搾取と従属が、アメリカ国内における人種差別および性差別と同じ構造をもっていると考えていた (Gough 1993: 283)。このような差別と搾取に対して反対を表明した人類学者たちの中には職場を追われた者もいた。ゴフが反戦・反帝国主義運動に積極的に参加した代償として大学の職を失ったことを見た多くの人類学者たちは、保守化したり、権力の横暴に対して沈黙するようになった。これが多くの人類学者がゴフたちの行動主義から学んだ教訓だったとデヴィッド・プライスはいふ (Price 2004: 326, 339)。FBI によるゴフの監視と二度に渡るゴフの大学からの追放については、プライスが詳しく書いているので、ここではキューバ危機の際にゴフがブランディース大学で行った演説についてだけ述べる。FBI はこの演説の全文を手に入れ、FBI のゴフのファイルに保管された記録を調査したプライスがその全文を掲載しているのを読むことができる。その一部を通して、ゴフの燃えるような言葉を想像してみよう。

1961 年、ゴフはブランディース大学において初めて大学の常勤の仕事を得た。1962 年 10 月、キューバにソ連製弾道ミサイルが設置されていることが発見された。アメリカによるキューバ攻撃と、ソ連とアメリカへの核戦争勃発の可能性が高まったキューバ危機 13 日間の 7 日目の 10 月 21 日、ゴフは学生が企画した政治集会で演説を求められた。ゴフは自分は外国人であり、アメリカの自由主義者より急進的であること、自分が国際主義者であることを断った上で、次のように話し始めた。

まず最初に、私がフィデル・カストロとその革命政府を強く支持する者の一人だということを言っておきたい。もし私が昨日ロンドンにいたなら、警官隊の規制のラインを超えてアメリカ大使館に押し寄せた2000人と一緒に「ビーバ、フィデル！ケネディー地獄に堕ちろー！」と叫んでいたはずで、私は詩的表現が好きではありません。しかし、これが私の今の気持ちです。私はカストロを20世紀半ばのアメリカのヒーローとして深く尊敬すると共に、この恐ろしい危機に直面しているカストロ、その政府、人びとに対して同情と悲しみを禁じ得ません。私は心の底から、彼らの成功と安全を願っています。もし戦争になったら、私は第一に、北も南も、東も西も、私たちの全てが滅びる核戦争に発展しないことを望みます。(…)しかし、私は第二に、もしこれが限定的な戦争であれば、キューバが勝って、アメリカ合衆国が全世界の前で恥をかき、ラテンアメリカにおけるアメリカの帝国主義的なヘゲモニーが永遠に終わることを希望します。

続いてゴフは自分がなぜカストロを支持するのか、なぜカストロに敬服しているのかについて話しを続けた。

私がカストロ政権を支持する第一の理由は、アメリカ合衆国が支えたバチスタによる拷問、汚職、血にまみれた専制政治を終わらせたこと、第二の理由は、カストロ政権が農業改革を行ったことです。カストロ政権は、農業生産の多角化を試み、巨大法人による締め付けと、単一作物経済の弊害を取り除くことを試み、工業化と近代化を押し進めました。読み書きを普及し、道路、学校、病院を建設しました。ハバナの街から汚職と売春を追放して大ホテルを空にして、地方出身の貧しい女性たちをそこに住ませて調理とミシンの使い方を教えました。私はカストロに敬服しています。彼が強い者を権力の座から引きずり下ろして、身分が低い従属した人びとの地位を引き上げたからです。彼がはらぺこの人びとを良いもので満たし、金持ちを空っぽにしてマイアミに送ったからです。私がキューバ政府に敬服するもう一つの深遠な理由は、この政府が平等、すなわち法による社会的な平等と経済的な意味での平等をニグロに与えたことです。

(Gough in Price 2005: 310-311)

ゴフはこの演説の後、学長に呼ばれて、二年間の契約が終われば、雇用を打ち切ると告げられた。ゴフとアベリーはブランディース大学を去り、アベリーはオレゴン大学の人類学の教授となり、ゴフはオレゴン大学で非常勤で教え始めた。1964年、アメリカはベトナムにおける戦争を本格化させて行った。反戦活動をキャンパス内外で行ったゴフとアベリーは、成績の悪い者から優先的に若者を戦場に送った成績と徴兵制度がリンクした教育システムに加担することを避けるために、1967年にアメリカを去ってカナダに移住した。アベリーはUBCの教授になり、ゴフはサイモン・フレイザー大学の非テニユアの教授になった（Price 2005: 306-326）。

1962年10月21日の演説に戻ろう。アメリカの帝国主義に反対したゴフが発展論者であることは、ゴフがカストロ政権を支持する第二の理由から明らかだ。従属する弱者を帝国主義の圧政から解放して、物質的にも、法的な権利においても隷属状態に置かれていた人びとの平等を達成するためには、ケララの1957年、より根源的にはキューバの1960年に見られるような革命政府主導による発展と開発の政策の遂行が必要だとゴフは考えていた。人類学にとって困難な問題が、ここに横たわっている。それは普遍的な自由と平等、固有の文化と社会関係に関わる問題だ。普遍主義的な国際主義者だったゴフは、古い伝統や儀礼、習慣、社会組織、神話などは、平等な社会を実現するためには無くなるべきだと考えていた。少し過剰に解釈すると次のように言うことができるだろう。人類学者がクロード・レヴィ＝ストロースのように消えて行く文化を嘆き、その本質を見事な腕前で分析してみせたり、国費あるいは企業家の慈善事業の資金を使ってその遺物を美術館に保存するために努力したとしても、生きている彼ら彼女らを従属状態から自由にしない。それは欺瞞だ。それは自分たちのためになっているだけだ。ゴフは文化の保存ではなく、差別がなくなる社会の到来を可能にする未来を待望して、それを可能にするだろう小農たちの反乱の可能性を追い求めた。

ゴフは1955年に *American Anthropologist* のために書いたある書評の中で、人類学者はインフォーマントと一緒に滅び行く神話を信じてはならない、社会改革、急速な工業化、（社会的な分裂ではなく）内的な統一、進歩的な教育こそが必要なのだと主張している（Gough 1955c）。当時ゴフはマンチェスター大学の講師をしていた。彼女はこの時すでに、人類学が伝統的に記述と分析の対象として来た社会とその文化は、従属した弱者たちの自由と平等を実現す

するためには変容するべきだと考えていた。1955 年は『悲しき熱帯』が出版された年だ。1957 年にケララに共産党政権が誕生する数年前から、ゴフは新しい社会の到来を待っていた<sup>[4]</sup>。

### 人類学と帝国主義

カナダに移住する前の 1967 年 3 月、ゴフは帝国主義と人類学の関係について議論した論文 *New Proposals for Anthropologists* をサンフランシスコで開かれた人類学の学会で発表した。この論文はこの後、インドの *Economic and Political Weekly* (September 9, 1967) に発表され、1968 年にその改訂版が *Monthly Review* 誌上で *Imperialism and Anthropology* として、また別のバージョンが *Current Anthropology* において *New Proposals for Anthropologists* として発表された。ゴフは人類学者は革命が起こりつつあるフィールドと反動的な雇用者との間で板挟みの状態に陥っているという。ゴフは次のように問いかけた。なぜ人類学者は消えつつある小規模集団を研究対象とするだけで、単一現象（あるいは世界システム）としての帝国主義を研究の対象にしないのか。アメリカ人は帝国主義的な政府に妥協しすぎているのではないか。だから、問題は人類学者がいかにして自由を取り戻すかだ (Gough 1968a, 1968b)。

ゴフは皆が知っていたが、はっきり言わずに済ませてきた人類学と権力にかかわる問題を、このような明確な形で表明して、サイモン・フレイザー大学から追放された (Gough 1970b, 1993)。1960 年代のアメリカで、あるいは帝国の影響下にある政治のフィールドで、国家権力と人類学と戦争の関係についてゴフのように発言することが一体どのようなことなのか、我々には容易に想像できない。ゴフはこの後、1990 年に亡くなるまで二度と大学の職に就くことはなかった。ゴフは亡くなる直前の 1990 年に *Economic and Political Weekly* に発表した “*Anthropology and Imperialism*” Revisited の中で、大学から追放されたことで自分を惨めだとは思わないが、学生たちとの接触が制限されたことは悲しかったと回想している (Gough 1993: 283)。研究と教育の制度を通して帝国主義が人類学の実践に作用することが問題だ。ゴフが批判の対象として取り上げた帝国

---

<sup>[4]</sup> 1963 年に発表された人類学における自由をテーマにした論文の中で、ゴフは抑圧されたケララとタミルナードゥの不可触民たちの解放と自由の可能性を示したのは共産党だと結論している。しかしインドにおいて共産党は権力を掌握できていなかった (Gough 1963)。

主義は、ゴフが大学という制度の中で教師として学生の指導が出来なくなるようにも機能した。

サイモン・フレイザー大学においてゴフのテニユアを審査した人事委員会は、ゴフがそれまでに書いた人類学の古典的著作を一切審査の対象にせず、問題を引き起こした *Imperialism and Anthropology* だけを審査して、「彼女の研究者としての客観性と学問的手続きには重大な疑問がある」と結論したという (Gough 1993: 283) <sup>[5]</sup>。ゴフの研究者としての客観性と彼女の学問的手続きには重大な疑問があると断定した人事委員会の結論が恣意的であることは明白だ。ゴフの緻密な民族誌とその古典的な人類学的考察を読めば、このような結論は出てくるはずがない。しかし、帝国は、恣意的な政治的判断を客観的な判断としてどこでも押し通すことができることを誇示する。その力は、研究を客観的に評価するはずの場においても働いている。権力の非合理的な働きが隠蔽されるのではなく、その働きが誇示される出来事が起こるたびに、学問の場が政治のフィールドでもあることが一層はっきりするだろう。同じフィールドにいる人びとが保守的な行動をとるようになることの中にその作用を見ることができるだろう。

ゴフが 1964 年にケララの再訪調査を行ったのは、彼女がブランディース大学を追われ、オレゴン大学で非常勤をしながら反戦運動を行った時期だ。アメリカ合衆国によるベトナム介入は本格化して、数年後にゴフが *New Proposals for Anthropologists* の中で訴えるジレンマが、大学で人類学を教える良心的な教師たちに経験されていただろう。フィールドから帰ったゴフは、ケララの村落におけるインド共産党の政治運動をテーマにしたポリティカルエコノミーの論文を続けて発表した (Gough 1965, 1967, 1968c)。ベトナムで小農たちの生活の上にナパーム弾と枯れ葉剤を大量にばらまいたアメリカ政府に妥協して人類学を実践してはいけない、と主張した彼女の政治的選択が、ケララ社会の政治プロセスの分析を、過剰にポリティカルエコノミー的なものにしていく。

UBC に保管されているゴフの資料の中で、1964 年にゴフがフィールドで書いたノートは、彼女が収集した新聞の切り抜きなどとともにボックス 7 と 8 に入っている。私はこの資料を調べている時、日付の無い“*Hamza Alavi, Peasant and Revolution*”の見出しの下に文章が書き写されたメモを見つけた。この文章は

---

<sup>[5]</sup> 亡くなる前に書かれたこの散文は歯切れが良くない。ゴフは自分がアメリカの帝国主義を攻撃するだけで、ロシアと中国の帝国主義を批判しなかったのは間違いだったと言っている (Gough 1993)。

1965年に *Socialist Resister* から出版されたアラヴィの有名な論文の一部だと思われる (Alavi 1965)。同じ論文はゴフがハリ・シャルマと編集した *Imperialism and Revolution in South Asia* にも収録されているから、これは彼女にとって重要な論文だったことが推察される (Gough and Sharma 1973)。論文が書き写されたメモには日付が無いので、これが *Socialist Resister* から書き写されたものか、出版前の原稿から書き写されたものかは判らない。いずれにせよ、ケララの再訪調査で集めたデータを、植民地においては搾取された貧しい小農たちが社会主義革命の担い手になると主張したアラヴィの革命モデルに沿って考察を試みたのだと考えられる。1964年のケララの資料の中には、この年に出版されたばかりのジェラルド・ヒッキーの *Village in Vietnam* の読書ノートもある (Hickey 1964)。ゴフがベトコンの活動に就いて書かれた部分のメモを取っていることから、ベトナムの小農が革命の担い手になり、搾取のない平等な社会を建設するという主題に関心を持ちながら、ケララ再訪調査で収集した資料を分析しようとしていた可能性は高い。

### 範疇間違い？

1995年に提出した博士論文の中で、私はゴフが使っている分析概念の変化に着目して、次のようなことを書いた。ゴフは1947年から1949年にかけて行ったフィールドワークから帰った後、1950年代に発表した複数の論文の中で、不可触民を低カーストの諸概念 (the lowest caste of agricultural serfs, a lower caste person, low caste men, the lower castes, lower caste persons) を使って表現している。しかし、1964年の再訪調査の後に発表した論文の中では低カーストの概念ではなく土地なし労働者 (landless labourer) という階級の概念を使っている。1957年にケララでは最初の共産党政権が誕生して農地改革を推進しようとした。1964年にゴフがケララを再訪した時、土地なしと農地改革は、主要な政治問題だった。しかし、低カーストの人びとが全くの土地なしだった訳ではない。私が調査をした地域では、不可触民のプラヤやパラヤの中には先祖代々土地を持っているリニージがいくつかあっただけでなく、農地改革を契機に土地を失った人びとも多かった。クラヴァに至っては、広い土地持ちを持っていたのが、1970年代、1980年代に入ってから土地を失い続けていることが判明した。私は、このような理由から不可触民たちに対して同情的だっただけでなく、彼らの階級としての可能性を信じるあまり、ゴフが人類学にとっては重大な範疇間

違いを犯したと考えた。農地改革が社会正義の実現に向けて、肯定的な意義を持っていたことには疑いの余地はない。しかし、ゴフが政治的な正しさを過剰に追求した結果、必ずしも土地なしではなかった不可触民たちを、土地なし労働者と記述したことによって、南インド社会の族誌的な記述の豊かな部分は豊かであり続けるとしても、その社会変容に関する人類学的分析は適切でないと思われた。

私はフィールドワークの最中も、フィールドから戻って博士論文を書いている間も、1960年代にゴフに起こった分析枠組みの変化を、人類学を貧しくする重大な範疇間違いと考えていた。分厚く豊かな民族誌の記述を実践するためには、このような制約を働くポリティカルエコノミーの概念を使うのは間違いだと確信していた。クリフォード・ギアツがアメリカの介入を含めて現実の政治過程と権力の働きについては沈黙して、分厚い記述の方法でインドネシア社会を豊かに、しかし没政治的に記述したことは偶然ではない。当時、私はゴフが1962年キューバ危機に際して、キューバを核ミサイルで攻撃しようとしたケネディー大統領の外交政策を公然と批判した結果、勤務先のブランディース大学から追放されていたことを知らなかった。私は1964年以降のゴフに範疇間違いを犯させたのは、ケララに於ける1957年の共産党政権の誕生と1964年の再訪調査の際、当時の支配的な政治言説に耳を傾けたゴフの政治的な傾向だと思っていた。

ゴフの民族誌の変化と、人類学からポリティカルエコノミーへの変節は、冷戦下のアメリカにおいて、フィールドがあった第三世界と、徴兵と人種差別が行われていた職場の両方で、暴力と差別に関わりを持った人類学者が、フィールドで衝突していた地主と小農の日常を遥かに超えた場所に起因していながら、彼らの自由と人類学者の自由の両方を制限する殆ど抽象的な形で作用すると言っても過言ではない単一現象に対して、限られた自由を行使しながら、政治的・学問的選択をして、これに立ち向かおうとした過程が生み出している。

## おわりに

ゴフは先に言及したU・R・エーレンフェルスによる山岳部族カダール研究の書評の中で、人類学者が平地のヒンドゥー教徒とのコンタクトを通じて伝統文化を失って行くカダールに同情を寄せて、貧しい部族が経験している価値の喪失を悲しんでいることは理解できるとしながらも、彼がこの山岳部族の失われた

芸能、技術、倫理観を復活させようと試みていることを批判している。ゴフはエーレンフェルスがカダールの神話の中の失われた黄金時代を妄信すると同時に、現代文明を暗に否定していることが受け入れられない (Gough 1955c)。短いはっきりしたこの態度表明の中に、ゴフが後に純粋な人類学を続けられなくなる岐路へ続く道すじが見えるようだ。ゴフは人類学が帝国支配の手段と化していることを批判する一方で、人類学を小農たちが起こすだろう社会主義革命に役立てようとしたのだろうか。ゴフの人類学は主流の応用人類学とはイデオロギーにおいては対極の位置にあるが、彼女は小農たちの側に立った応用人類学を目指したのだろうか。

西欧の人類学は、近代文明とのコンタクトによって、我々の世界から消滅して行った小規模の未開集団を感情移入を込めて描き出し、その消滅を悲しみ、彼女たちを消滅させた我々の文明の不条理を批判しつつ、より一般化された未開の魅力に我々を誘う得意パターンを持っている。レヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』やピエール・クラストルの『グアヤキインディアンの物語』はその典型だ。ゴフはこのような詩情と知的に洗練された対象の分析に隠された屈折した価値の存在、資本主義の発展と繁栄に支えられた西欧ブルジョア社会のナルシズムを見ていたのではないか。このような価値を担った人類学が本当に求めているのは、失われ行く部族文化とその回復ではなく、そのような冒険的で知的な作業の中に差異を探し求める、西欧ブルジョアの差異化し続けなければならない卓越した自己なのではないか。そのような人類学は世界規模でオーケストレーションしているシステム化した搾取と差異の創出を止めることができない。アメリカ人類学協会でベトナム戦争反対の動議が出された時、政治的な決議を行うことは人類学者の職業的な関心事ではないと言って反対したマーガレット・ミードの態度に現れていたように (Gough 1993: 280)、人類学の仕事は政治的なフィールドの中で行われていて、覇権を政治的に問題にすることはその主要な関心事ではなかった。

ゴフも少数部族の伝統的な価値観、技術、社会関係、仮面、衣装、儀礼が失われて行ったことを彼女らとともに悲しむだろう。しかし、差別の無い平等な世界の実現を信じていたゴフは、伝統の保護ではなく、変容してゆく小規模集団の中に革新の萌芽を見つけ出し、これを育てる仕事に手を貸すことを選ぶだろう。基本的にブルジョアの知的活動である人類学の参与観察と省察は、多くの著名な人類学者たちの大学における仕事がそうだったように、帝国の戦争に間



接的に加担することはあったが、これを止めることはできなかった。だからゴフはその緻密な民族誌の記述に、レヴィ＝ストロース流の叙情ではなく、別の未来に向かう青写真を持った散文的なポリティカルエコノミーの分析（という名の預言）を接ぎ木しようと試みたのではないか。これが「私は詩的表現が好きではない」とゴフが言うことの含みのひとつではないか。

フラーが1990年10月3日付のイギリスの高級紙 *The Independent* のために書いたゴフの死亡記事によると、ゴフはカンボジアを訪れてポルポトによるカンボジア人虐殺について知った後、アジアにおける革命の可能性について抱いていた楽観主義を失ったという。フラーはまたゴフの著作は教条主義的ではなく、事実に忠実であり、フィールドワークで発見した自説にとって都合の悪い事実に対しても彼女は忠実だったと書いている (Fuller 1990)。ゴフは人類学の著作とポリティカルエコノミーの著作を書いた。ゴフの人類学的著作には、彼女の戦闘的な政治的発言と相容れない部分があった。ゴフの著作の価値を支えているのは、感情を交えず、事実に忠実であろうとした対象社会の詳細な民族誌的記述だ。ゴフが細かなところまで丹念に調べ上げて書いた民族誌と、彼女が冷戦の中で選択した平等な社会の到来への渴望に根ざした分析枠の間に横たわる断絶の両側に、ゴフの良心的な仕事を読み取ることができる。

1950年代の初めに人類学者としてはゴフよりも理論的に洗練された議論を展開したミラーは、2002年に亡くなる数年前まで、人類学と心理学を生産と組織のマネジメントに利用することを目的にした実学の世界で活躍した。その剃刀のように鋭い洞察は、人間に関わる組織であればそれが歴史の中で何を働く組織であったとしても、人間集団を使って効率的な仕事をするために利用できる。他方ゴフは、政治的な発言と活動を通して、世界システムとなった帝国主義の底辺で生きる人びとの自由と平等の実現のために働こうとした。バチスタ政権を倒したキューバ革命、農地改革を行った南インドの共産党の活動、アメリカが負けたベトナム戦争に、ゴフは差別の無い社会の到来への希望を見出した。カンボジア革命はその楽観主義に暗い影を落とした。ゴフの人類学は、首尾一貫して事実に忠実であろうとする態度で貫かれていた。例えそれが、彼女の信条にとって都合の悪い事実だったとしても。

1947年から1949年にかけて、ケララの社会構造、政治組織、カースト間関係のノートが二つの筆跡で書かれた時から、南インドの社会運動、キューバ革命、ベトナム戦争の中に小農を見だし、その前衛としての可能性に呼応しようと

して性急に岐路を踏み越えながらも、フィールドで丹念にノートを書き続けたゴフの歩みは、凄まじい。「私は詩的表現が好きではありません。」しかし、ゴフのメタ物語の何と詩的なことか。

## 謝辞

LSE のクリス・フラー教授がゴフについての意見を添えてインディペンデント誌に寄稿した死亡記事を送ってくれたこと、また UBC のアーカイブでゴフの資料を読むにあたってレスリー・フィールド氏が協力してくれたことに対して、感謝の意を表したい。

## 参考文献

- Alavi, Hamza 1965. Peasant and Revolution. *Socialist Resister* 1: 241-277.
- Donald, Leland 2006. David Friend Aberle (1918-2004). *American Anthropologist* 18(1): 263-266.
- Frankenberg, Ronald 1990. Kathleen Gough Aberle. *Anthropology Today* 7(2): 23-25.
- Fuller, C. J. 1983. Review of Gough's Rural Society in Southeast India (1982). *Man* (n.s.) 18(3): 614-615.
- Fuller, C. J. 1990. Kathleen Gough. *The Independent*. October 3.
- Gough, Kathleen 1952. Changing Kinship Usages in the Setting of Political and Economic Change Among the Nayars of Malabar. *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 82(1): 71-88.
- Gough, Kathleen 1955a. Female Initiation Rites on the Malabar Coast. *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 85(1/2): 45-80.
- Gough, Kathleen 1955b. The Social Structure in a Tanjore Village. In M.N. Srinivas ed. *India's Villages*. Calcutta: West Bengal Government Press.
- Gough, Kathleen 1955c. Review of *Kadar of Cochin* (1952) by U.R. Ehrenfels. *American Anthropologist* 57(1): 150-152.
- Gough, Kathleen 1959a. Cults of the Dead Among the Nayars. In Milton Singer ed. *Traditional India: Structure and Change*. Philadelphia: American Folklore Society.
- Gough, Kathleen 1959b. The Nayars and the Definition of Marriage. *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 89(1): 23-34.

- Gough, Kathleen 1960. Caste in a Tanjore Village. In Edmund R. Leach ed. *Aspects of Caste in South India, Ceylon and North-West Pakistan*. Cambridge: CUP.
- Gough, Kathleen 1962. The Decline of the State and the Coming of World Society. *Correspondence Pamphlet* 4.
- Gough, Kathleen 1963. Indian Nationalism and Ethnic Freedom. In David Bidney ed. *The Concept of Freedom in Anthropology*. The Hague: Mouton & Co.
- Gough, Kathleen 1965. Village Politics in Kerala. *The Political Weekly*. February 20 and February 27.
- Gough, Kathleen 1967. Kerala Politics and the 1965 Election. *International Journal of Comparative Sociology* 8: 55-88.
- Gough, Kathleen 1968a. Anthropology and Imperialism. *Monthly Review* 19(11): 12-27.
- Gough, Kathleen 1968b. New Proposals For Anthropologists. *Current Anthropology* 9(5):403-407.
- Gough, Kathleen 1968c. Communist Rural Councillors in Kerala. *Journal of Asian and African Studies* 3(3-4): 181-202.
- Gough, Kathleen 1970a. Palakkara: Social and Religious Change in Central Kerala. In K. Ishwaran ed. *Continuity and Change in India's Village*. New York: Columbia University Press.
- Gough, Kathleen 1970b. The Struggle at Simon Fraser University. *Monthly Review* 22(1): 31-45.
- Gough, Kathleen 1978. *Ten Times More Beautiful: Rebuilding of Vietnam*. New York: Monthly Review Press.
- Gough, Kathleen 1981. *Rural Society in Southeast India*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gough, Kathleen 1989. *Rural Change in Southeast India 1950s to 1980s*. Delhi: Oxford University Press.
- Gough, Kathleen 1990. *Political Economy in Vietnam*. Berkeley: Folklore Institute.
- Gough, Kathleen 1993. "Anthropology and Imperialism" Revisited. *Anthropologica* 35(2): 279-289.
- Gough, Kathleen and Hari P. Sharma eds. 1973. *Imperialism and Revolution in South Asia*. New York: Monthly Review Press.
- Hickey, Gerald C. 1964. *Village in Vietnam*. New Haven: Yale University Press.
- Miller, Eric J. 1953. Review of *Land and Society in Malabar* (1952) by Adrian C.

- Mayer. *Man* 53: 77.
- Miller, Eric J. 1954. Caste and Territory in Malabar. *American Anthropologists* 56(3): 410-420.
- Miller, Eric J. 1955. Village Structure in North Kerala. In M.N. Srinivas ed. *India's Village*. Bombay: Media Promoters & Publishers.
- Price, David 2004. *Threatening Anthropology: McCarthyism and the FBI's Surveillance of Activist Anthropologists*. Durham: Duke University Press.
- Schneider, David and Kathleen Gough eds. 1961. *Matrilineal Kinship*. Berkeley: University of California Press.
- Stein, Mark 2002. Obituary: Eric Miller. *The Independent*. April 12, 2002.
- Tanham, George K. 1966. *War Without Guns: American Civilians in Rural Vietnam*. New York: Frederic A. Praeger.

(2007年1月11日)